2022 Spring
vol. 6

甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

これからの〈女性教育〉の話をしよう

NEWS LETTER

甲南女子大学では、2022年度からいよいよ本学独自の女性教育に取り組むことになりました。女性教育については、既に「女性教育プロジェクト」のメンバーのみなさまの真摯な取り組みにより、さまざまな実績をあげてきたところです。今後はこれらを基盤としつつ本学としての独自性を強調した女性教育を「大学の柱」と位置づけ、女性として身に着けるべき知識や実践活動をより一層充実させ、自信を持って社会で活躍できる女性を全力で育てることを目指します。

また、女子大学として共学大学との違いを明確にし、女子大が果たすべき役割を「見える化」し、新しい時代にふさわしい使命を果たします。「女性を本気で応援する教育」を全学の目標として共有し、すべての教職員のみなさまに全力でご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

甲南女子大学
KONAN WOMEN'S UNIVERSITY

学長補佐（女性教育担当）**中野 加都子**

新時代の人材育成

学長　**森田 勝昭**

科学技術の急激な進展、大きく変わる産業経済、地球環境、人口問題や貧困問題など、私たちは今、未曾有の変化の時代に生きています。日本の女性高等教育黎明期、先達たちが目指したのは「女性の地位向上」でした。今もその目標が十分に達成されたとは言えませんが、現代はさらに新たな課題が加わりました。すなわち、圧倒的な科学の時代に、人間の可能性をいかに引き出し、未来を切り拓いていけるかという課題です。

変化の時代には、新たな希望が育まれなければなりません。価値を生み出す新しい人材が登場しなければなりません。変化の時代はときに厳しい環境ですが、新たな価値が生まれる豊かな土壌でもあります。新たな人材は、常に、変化の中から生まれてきます

変化に向き合うには、多様な人々が生み出す新しい価値が必要です。それを実現する最大の力は女性です。変化の時代に人間本来の潜在力を引き出す。そうした人材を育てることこそ、女性教育のミッションなのだと思います。建学の精神「まことの人間をつくる」は、人間の新しい価値づくりをめざす人材育成教育です。甲南女子大学はその教育の先頭に立ってまいります。

全学をあげての本学独自の女性教育をスタート
―女性関連科目の検索について―

学長補佐（女性教育担当）　**中野 加都子**

新入生が大学に入学してまず直面するハードルは、必修以外の受講科目の選択、時間割の組み方ではないかと思います。在学生にとっても、必要単位を満たし、よい成績をとるという必要最低限の条件のみでなく、大学生活を有意義なものとし目標を実現するために、受講科目の選択が大きな迷いとなります。

女性としての教養を身につけたい、女性として活躍したい、女性として就職に有利な資格に挑戦したいなど、学生が女子大を選んで入学した動機や理由はさまざまだと思います。しかし、いざ科目の選択という段階になると、どうすればよいのかわからないというのが実態だと思います。

考えてみると、教職員の立場からは自分の考えや分野ごとの専門により「女性教育」をとらえ、それぞれの科目、授業内容を提供できます。しかし、学生の立場からは、どの科目が女性として勉強したい内容と合致するのか、どの科目に希望する内容が含まれているのか、見当がつかないというのが現実ではないかと思います。

そこで、2022 年度からの新たな取り組みとして、女性教育を含む科目を、学生が授業登録をする場面で簡単に検索できるシステムを導入しました。これは Campus Square でも詳しく説明されていますように、教員がシラバス登録をする際に「＃女性」または、「＃女性教育」というキーワードを入力しておくことによって、女性教育関連科目を学生が簡単に検索できるというものです。キーワードは、科目に対して設定することも、女性をテーマとした授業回にのみ設定することも可能です。

まずは検索によって、女性関連科目や内容にはどのようなものがあるかを知る、そのことが学生には女性について学ぶ第一歩となります。そうしたきっかけを通じて、より深めたい内容について専門科目を選択し幅を広げていく、その積み重ねによって女性に関する学びを学生なりに系統立て、女子大で学ぶ意味を自覚し女子大で学んだことに自信を持てるようになると考えています。全学でこの第一歩にご協力いただきますよう、よろしくお願い致します。

特集
書評

『本気で女性を応援する女子大学の探求－甲南女子大学の女性教育』（明石書店、2021年）

専門家はどう読んだ？　これはジェンダー平等のための「本気」だ

大阪大学大学院教授　**木村 涼子**

「女子大学ってこんなによい環境なんだ！」
ずっと共学で学んできた私が、教員として女子大で赴任して抱いたのは、そんな想いでした。今はなき府立大阪女子大学（2005 年大阪府立大学に統合）に着任する前、「ジェンダーと教育」を専門とする私は、別学よりも共学の方がジェンダー平等に合致していると考えていました。同僚として迎えてくださる教育史の先生から、今後がらりと別学賛成に立場を変えないでねと、笑いながら言われたことを覚えています。

しかし着任後、その先生の懸念どおり、私は別学の良さを痛感することになります。そこでは、女子学生たちがキャンパスの主役としてのびのびと学んでいました。また、女性学研究センターが中心となって女性学の授業や催しを運営していました。ゼミ生たちが「自分たちは女性学やジェンダーの視点を学ぶ機会に恵まれた」と語っていたことも思い出されます。緑の多いキャンパスで女子学生たちと学ぶ経験はきらきらした陽光に彩られているかのようであり、その輝きと比較すると、「第二の存在」として位置づけられがちであった自分の共学経験はどこか屈折した翳りを帯びていたとあらためて認識することになりました。

『本気で女性を応援する女子大学の探求－甲南女子大学の女性教育』を拝読し、私はかつて女子大学に対して感じた希望と期待をまざまざと思い出しました。歴史ある「老舗」女子大学の一つである甲南女子大学が、21 世紀にふさわしい女性を育成するために、本書のタイトルどおり、まさに「本気」になっていることに目をみはりました。カリキュラム全体において女性教育を中心に据えるだけでなく、キャンパスのあらゆる場面で「女性」の現在と未来を意識した取り組みを展開しておられます。共学においてジェンダー平等の実現が重要であることは言わずもがなですが、女子大学の存在意義はいまも大きいでしょう。甲南女子大学で学ぶ学生は、人生の主役になるための力を身に着ける豊富な機会に恵まれています。大学の側の「本気」に学生の側も「本気」で向かう時、さらに大学も一歩進んだ「本気」を見せることになる、その展開に期待しています。

学生はどう読んだ？　「女子大」ということに胸を張って

多文化コミュニケーション学科3年　大学ビブリオバトルオンライン大会2020チャンピオン　**堀内 八衣乃**

私は、甲南女子大学が第一志望ではありませんでした。
本の序論にもあるように、まさに私は女子大学にマイナスイメージをもって入学してきた生徒でした。しかし、甲南女子大学の居心地の良さ、学びやすさを実感することで、女子大に対するマイナスイメージが払拭されました。なぜ、甲南女子大学はこんなにも居心地がいいのか。今回、この本を読むことで、その理由に気づくことができました。

居心地の良い理由の一つとして、まず、読んでいてもひしひしと伝わってくる、各先生の「本気度」があげられます。学問に対してはもちろんですが、「女子大で教育を担う」ということの意義をそれぞれが持たれていて、各先生の力を強く感じました。

次に、「女性教育プロジェクト」をはじめ、私たち女性のことを考えたさまざまな活動が積極的に行われているということです。私は今回このプロジェクトを初めて知りましたが、「女性教育研究所」は今後の女性教育のためにぜひ作っていただきたいと思います。

今回、この本を通じて、女性教育に対する様々な思いを知ったことで、今後、「女子大学で教育を受けた」ということに胸を張って生きていきたいと思うようになりました。就職活動も本格的に始まり、徐々に社会人の仲間入りをするというこの時期に、この本に出会えたことは私にとって大きな強みです。今、女子大学に通っている方はもちろん、通っていた方、今後通う予定の方にもぜひ読んでいただきたいです。この本を書いた方々がこんな風に応援をしてくれている甲南女子大学に通っていることを心から嬉しく思い、誇りに思います。

女性教育カリキュラムの授業やってみた！
共通教育「女子学」の授業で

日本語日本文化学科 **信時 哲郎**

共通教育科目「女子学」の中で、ミスコンについて話している。ミスコンの歴史を振り返り、ミスコンが今後どうなっていくのか、ルッキズムが今後どうなっていくかについて考えるきっかけとなれば、と思ってのものだ。

ミスコンテストと言えば、男性審査員の前で女性が品定めをされるようなイメージを持つかもしれないが、最近は女性たちの意識も変わってきたようだ。本学の清光会が2015年に大学を盛り上げるためのイベントとして、ミスコンの実施を提案したのもその一例だが、背景には林真理子が美女入門シリーズ（1999～）をヒットさせたり、「an・an」で「美人は誰でもなれる！」（2004.10）が特集されるように、美人は生まれつきの部分もあるにせよ、努力してなるものだという意識が強くなったことも影響しているのだろう。或る大学のミスコン・ファイナリストが「学生生活の集大成として、高い目標に向かって頑張りたかった」と、就職活動用の自己ＰＲのように語っているのも、ミスコンが男性社会への迎合という以上に、自己実現の道だと意識されているためだろう。

「女子学」の授業で聞いてみたところ、「女性にとって容姿は大切だと思いますか」「あなたは美人が好きですか」という質問に対して、圧倒的多数で「はい」と答える学生が多かった。ただ、「女性の容姿に優劣を付けること」については半数が反対しており、美を重視するにしても、コンテスト的なものが重要視されているわけではないようだ。

ルッキズムに対する批判は世界的な潮流になっているが、この先、学生たちの意識がどうなるのか、日本のミスコンがどうなっていくかについては、引き続き見守っていきたいと思う。

リレーエッセイ

アート史の中の女性の「何か」

メディア表現学科 **八尾 里絵子**

自身が歩んできた分野を振り返ってみると、20 世紀以降のメディアテクノロジーとアートの関係を研究するうえで、女性の「何か」に目を向ける機会がなかったことに気づきます。アート作品には伝えたい主題があり、そのための表現手段は多種多様にありますが、私自身の興味はいつも、私たちをとりまく環境としてのメディアテクノロジーとその発展に伴う新たな表現にあり、女性の「何か」と結びつくことがなかなかありませんでした。本学で担当している講義資料を見返し気づいたことですが、事例として取り扱う作家や作品は殆ど男性作家のものしかなくて、これには少し驚きました。

さて、そんななか、2021 年 6 月の「Viva Video! 久保田成子」展、同年８月発行の美術誌「美術手帖」の特集「女性たちの美術史」などで、これまでにこぼれ落ちてきたといわれる、アート史の中の女性作家たちの掘り起こしや再検証がなされています。これは世界的にもみられる動きであり、「何か」が変化していくことを身をもって体験しています。

アート作品の評価に、女性作家、男性作家という分類はナンセンスです。しかし、社会が急速に変革しているこの時期こそ、女性の「何か」という視点を少し取り入れてみたいと考えています。今はその「何か」が何なのか？を問う状態ですが、この小さな意識の変化に気を向けてやらないと、またもやアート史から「何か」がこぼれ落ちてしまいそうだから。

これからの〈女性教育〉の話をしよう
NEWS LETTER vol.6 2022 Spring
発行日　2022 年 3 月
発行元　甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

問い合わせ　ウォント盛香織
e-mail　kaorimw@konan-wu.ac.jp
編集責任　中野加都子
e-mail　knakano@konan-wu.ac.jp